

西アジア後期新石器時代における土器研究の新動向

—専門家ワークショップ「描かれる器・描く人」に参加して—

小高 敬寛

A Note on the Specialist Workshop, "Painting Pots — Painting People:
Investigating Decorated Ceramics from the Late Neolithic Near East"

Takahiro ODAKA

キーワード：専門家ワークショップ、国際学術交流、後期新石器時代、土器、装飾

Key-words: specialist workshop, international academic collaboration, late Neolithic, pottery, decoration

はじめに

専門家ワークショップ「描かれる器・描く人—近東後期新石器時代における装飾土器を探る— (Painting Pots — Painting People: Investigating Decorated Ceramics from the Late Neolithic Near East)」は、チェコ・マサリク大学の I. マテイチュツォヴァ (Matejicová) 氏、スペイン・バルセロナ自治大学の W. クルエルス (Cruells) 氏、オランダ・ライデン大学の O. ニュウェンハイス (Nieuwenhuyse) 氏のオーガナイズによって、2012 年 1 月 27 日から 30 日にかけての 4 日間、チェコ共和国ブルノおよびレイヴィスにて開催された (図 1)。キャッチーではあるが、何とも和訳しづらいタイトルが冠せられたこのワークショップは、副題にあるとおり西アジア後期新石器時代の彩文土器研究を対象として企画された。

後期新石器時代に先立つ先土器新石器時代、そして後続する銅石器時代を対象とした国際会議は、以前から幾度となく催されてきた (e.g. Healey 2008; 小泉 2008)。いっぽう、その狭間にある後期新石器時代については、これまで光を当てられることが少なかったが、最近になってその空白を埋めるべく、いくつかの催しが開かれはじめた。なかでも、2009 年 3 月にオランダ王国ライデンで開催された国際会議「北メソポタミアの後期新石器時代を読み解く (Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia)」は、43 本ものの口頭発表と 25 本のポスター発表が集まり、たいへんな盛況であった (Nieuwenhuyse et al. 2009; 小高 2010)。後期新石器時代研究にかんして、国際的な意見交換の場を求める需要の大きさが示されたといえるだろう。ただし、研究発表の主題があまりに幅広くなってしまい、議論は総花的で焦点に欠けたきらいがあったことも否めない。いっぽう、2009 年 10 月に筑波大学で開催された国際

シンポジウム「西アジアにおける土器の出現—パイロテクノロジーの原点を求めて— (The Emergence of Pottery in West Asia: The Search for the Origin of Pyrotechnology)」では、土器の起源という明確で絞り込まれた論点が用意され、きわめて専門的かつ生産的な議論が展開された (常木 2009)。しかし、開催地・日本には、研究対象となる西アジアや研究者が数多く在住する欧米諸国との物理的距離という、如何ともしがたい不都合があり、研究発表は招聘者によるものだけに限られてしまったため、広く国際的に開かれた意見交換の場になったとはいい切れない部分が残る。

今回のワークショップでは、これら近年における国際会議やシンポジウムの経験を踏まえ、後期新石器時代研究の新たな意見交換の機会として、論点を専門的に絞りながらも開かれた場が提供された。筆者が企画を知ったのは 2011 年初頭、オーガナイザーの一人であるニュウェンハイス氏から送られてきた電子メールによってであった。この電子メールは、企画の概要を知らせるとともに研究発表の意思や参加可能な時期を問い合わせる内容であり、旧知の研究者諸氏には同様の連絡があったようだ。3 月になって開催時期が翌年 1 月末に決まり、10 月にはウェブサイト (<http://www.phil.muni.cz/archeo/papv/index.html>) が立ち上がって、情報が広く周知されるとともに参加者が公募された。年末には発表者リストや発表要旨がウェブサイト上に公開され、年明けていよいよ本番の時を迎えることとなった。

ワークショップの概要

以下、ワークショップの概要をほぼ時系列に沿う形で述べる。詳しいプログラムは図 2 にあげた。配付された要旨



図1 参加者に配付された要旨集（内表紙）

集から転載したもので、実際の時間経過は少々異なっていたかもしれないが、大きな変更はなかったように記憶している。また、3~4名ほどの欠席者が出てしまったが、参加者として公式に名を連ねたのは総勢29名であった。その在住国を内訳してみると、最多がスペインとドイツで各5名、開催国チェコはフランスやトルコと並んで3名、イギリス、オランダ、ポーランド、アメリカが各2名、デンマークと日本が各1名となる（実際には欠席した者を含む）。これに、マサリク大学で考古学を学ぶ学生・

大学院生のスタッフが10名近く加わった。彼ら・彼女らも議論に加わっていたので、実質的な参加者といえるだろう。ほかに、当初より不参加の予定ながら、共同の研究発表者としてチェコとトルコの研究者1名ずつの名前が挙がっていた。

初日にあたる1月27日は、ブルノ市街にあるマサリク大学に集合し、貸し切りバスでレイヴィスへと移動する日に当てられたが、希望者を対象として、近くにあるモラヴィア博物館（Moravské Zemské Muzeum）を見学するエクスカージョンが組まれていた（図3）。前日の夜、チェコ共和国の首都プラハに降り立った筆者は、これに間に合うよう早朝に長距離バスで発ち、2時間半かけてブルノに辿り着いた。お目当ては同博物館の人類学研究部に保管されている、ドルニ・ヴェストニツェ（Dolní Věstonice）遺跡出土の遺品である。これには世界最古の焼成土製品（土偶）が含まれており、館内では複製品が常設展示されているものの、今回はオリジナルを実見する貴重な機会に恵まれた。一般展示のほうは考古学部門のみ見学したが、筆者には地元チェコのP. ハルヴァート（Charvát）氏が一对一でいねいに解説してくださった。著名研究者からの思いがけない厚遇にすっかり恐縮しつつも、おかげさまでモラヴィア地方の歴史とヨーロッパ考古学のもつ独特の雰囲気に触れることができた。

その後、移動したレイヴィスは、ブルノから自動車で北に3時間余り、ポーランドとの国境に近いチェコ北部の山間に位置する、慎ましやかなペンションが立ち並ぶ小さな村であった。真冬の開催であったため、日中でも気温は零下、夜は零下20度近くまで冷え込むといった具合で、軒先には長さ1mを超える見事な氷柱が垂れ下がっていた。周囲のリゾート客はもっぱらスキーを楽しんでおり、夜には若者たちのダンスパーティーの喧騒が遅くまで聞こえてくることもあった。このように楽しげな光景がみられる行楽地であったが、翌々日に主催者側の用意で昔話を披露してくださった村の古老によれば、もともと大陸そしてヨーロッパ特有の、さまざまな民族が行き交い入れ替わる土地柄であったようで、過去には多くの不幸な歴史も刻まれてきたらしい。村のところどころにはためいていた欧州連合（チェコ共和国は2004年に加盟）の旗は、平和な未来への祈念が込められているように映った。

ワークショップの主会場になった「Chata Dolina（谷の家）」は、オーガナイザーの一人マティウツォヴァ氏のご母堂が経営されているペンションであり、大きな暖炉のあるダイニングルームが発表会場兼食堂兼宴会場として終日利用された（図4）。毎昼夜、振る舞われたご母堂お手製の郷土料理は実に圧巻で、参加者に大変な好評を博した。しかも、チェコ名産のビールはさすがに地元醸造所製

WORKSHOP PROGRAM PAINTING POTS – PAINTING PEOPLE

FRIDAY 27

10.00–13.00	Visit of the Anthropos Institute (original of the Paleolithic Venus from Dolní Věstonice – the oldest ceramic of the world) and the archaeological exhibition of the Moravian Museum (Ditrichstein Palace) in Brno.		
15.00	Departure from Brno. The bus leaves from the main building of the Faculty of Arts of Masaryk University (about 150 m from the place of registration).		
19.00	Welcome in Rejvíz – Inna Mateiciucová		
19.15–24.00	Dinner and drinks		
20.30–21.00	Lecture	Mirko Vaníček	THE GEOLOGY OF REJVÍZ REGION AND THE JESENÍKY

SATURDAY 28

8.30–9.00	Coffee		
9.00–9.20	Introduction	Olivier Nieuwenhuysse, Walter Cruells & Inna Mateiciucová	INTRODUCING THE WORKSHOP
9.20–9.50	Opening	Petr Charvát	WHAT HAPPENED IN PREHISTORY: CAN SHERDS SPEAK?
9.50–10.10	Lecture 1	Marie Le Mière & Mihriban Özbasaran	DARK AND LIGHT COLOUR IN NEAR EASTERN POTTERY DURING ITS INITIAL DEVELOPMENT
10.10–10.30	Lecture 2	Dalibor Všíanský, Inna Mateiciucová, & Miroslava Gregerová	ANALYZING PREHISTORIC POTTERY PIGMENTS FROM LATE NEOLITHIC TELL ARBID ABYAD
10.30–10.50	Break (20 mins, coffee)		
10.50–11.10	Lecture 3	Beatrice Robert	NEW INSIGHTS ON HALAFIAN ZOOMORPHIC POTTERY PRODUCTION
11.10–11.30	Lecture 4	Olivier Nieuwenhuysse	POTS TO BE SEEN
11.30–11.50	Discussion (20 mins)		
11.50–15.00	Lunch & Rest (3 hours)		
15.00–15.20	Lecture 5	Takahiro Odaka	DECORATION OF NEOLITHIC POTTERY IN THE NORTHERN LEVANT
15.20–15.40	Lecture 6	Anna Gómez Bach	DECORATED HALAF POTTERY
15.40–16.00	Lecture 7	Bonnie Nilhamn	PAINTED PLASTER
16.00–16.20	Lecture 8	Alison Meakes	REVISITING NEOLITHIC POTTERY FROM SOUTHWEST IRAN
16.20–16.40	Discussion (20 mins)		
16.40–17.00	Break (20mins, coffee)		
17.00–17.20	Lecture 9	Lech Czerniak & Joanna Pyzel	LATE NEOLITHIC POTTERY AT CATALHÖYÜK EAST
17.20–17.40	Lecture 10	Ingmar Franz	AN 8000–YEAR-OLD POTTER'S LEGACY
17.40–18.00	Discussion (20 mins)		
19.00–24.00	Dinner and drinks		

SUNDAY 29

8.30–9.00	Coffee		
9.00–9.20	Lecture 11	Jörg Becker	THE PAINTED HALAF POTTERY FROM TELL TAWILA AND THE TELL CHUERA REGION
9.20–9.40	Lecture 12	Halil Tekin	THE LATE NEOLITHIC PAINTED POTTERY TRADITIONS ON THE UPPER TIGRIS VALLEY
9.40–10.00	Lecture 13	Josep-Miquel Faura & Miquel Molist	PAINTED POTTERY PRODUCTION AT VII MILLENNIUM (PRE-HALAF) TELL HALULA
10.00–10.20	Lecture 14	Walter Cruells	TRANSITIONS, IDENTITIES AND CHRONOLOGIES IN THE LATE NEOLITHIC OF THE NEAR EAST
10.20–10.40	Discussion (20 mins)		
10.40–11.00	Break (20 mins, coffee)		
11.00–11.20	Lecture 15	Ana Isabel Navajas-Jiménez	WHITE CROSS-LINED POTTERY IN THE NECROPOLIS OF NAQADA
11.20–11.40	Lecture 16	Frank Hole	PAINTED POTS AND PAINTING POTS AT UMM QSEIR
11.40–12.00	Lecture 17	Rana Ūzbal	PAINTED POTTERY AND VISUAL REPRESENTATIONS AT TELL KURDU
12.00–12.20	Discussion (20 mins)		
12.20–15.30	Lunch & Rest (3 hours)		
15.30–15.50	Lecture 18	Marc Adam Fenchel	A LATE NEOLITHIC NARRATIVE?
15.50–16.10	Lecture 19	Mücella Erdalkran	ANIMAL MOTIFS ON HALAFIAN PAINTED POTTERY
16.10–16.30	Lecture 20	Marie Hopwood	TRANSFORMATIONAL VESSELS: THE MEANING OF EATING IN THE HALAF PERIOD
16.30–16.50	Lecture 21	Catherine Breniquet	WEAVING AND POTTING IN THE LATE NEOLITHIC
16.50–17.10	Discussion (20 mins)		
17.10–17.30	Break (20 mins, coffee)		
17.30–18.00	General Discussion and review (30 mins)		
19.00–24.00	Dinner and drinks		

MONDAY 30

9.00	Departure from Rejvíz		
12.00–14.00	Lunch (Brno)		
14.00–17.00	Visit of the labs of the Institute of Geological Science (Faculty of Sciences, Masaryk University) and the Research Institute of Building Materials (VUSTAH)		
17.00–18.00	Goodbye drinks in the Department of the Prehistoric Archaeology of the Near East (PANE)		

図2 ワークショップのプログラム（要旨集より転載）



図3 モラヴィア博物館



図4 ペンション “Chata Dolina”

のようだったが、ハニーワインその他もろもろの酒類までも自家製ときていた。このペンションには学生スタッフを中心に若者たちが宿泊し、筆者を含む発表者の大半は歩いて10分ほどの場所にある別のペンションに寝泊まりしたが、いずれにせよレイヴィス滞在の間、参加者は文字通り日夜寝食を共にし、さながら「合宿」をしているかのようであった。この日の夜、夕食の前にあったマティチウツォヴァ氏による歓迎の挨拶では、このような市街から離れた閉ざされた空間のなかで研究仲間と濃密な時間を過ごし、深い議論を交わして固い友好関係を築くことこそが、本企画の立案にあたって目指したところの一つであるとの説明があった。夕食の間には、現地の地理学者 M. ヴァニェチェック (Vaněček) 氏によるこの地域の地理にかんするご講演もあり、初日から主催者側の手厚いもてなしに感服させられた。

テーマに沿った研究発表は2日目(1月28日)と3日目(同29日)に行われた。基調講演を含めて22本の口頭発表が予定され、2日間で11本ずつ行なうプログラムが組まれていた(ただし、うち1本はキャンセルされた)。ライデンでの国際会議に比べると約半数だが、ライデンでは石器にかんする発表が多く、土器については少ないという印象を受けていたので、この数の多さは驚きである。なお、口頭発表のほかに、マティチウツォヴァ氏が率いるハブール川流域テル・アルビッド・アビヤド (Tell Arbid Abyad) 遺跡の発掘調査、および出土品の研究成果を報じるポスターも、ダイニングルームの脇に掲示されていた。

研究発表に先立ち、オーガナイザーを代表してニュウエンハイス氏から趣旨説明があった。先史時代の彩文土器や後期新石器時代の研究史の概観に始まり、ワークショップ開催の経緯がライデンでの会議やつくばでのシンポジウムからの流れを踏まえつつ説明された。そして、先土器新石器時代の石器研究者や銅器時代の研究者たちが連携を深めているなかで、我われもそうしない理由はないとの趣意が示され、研究発表者諸氏とそれぞれの扱うテーマが紹介された。

基調講演は、モラヴィア博物館見学の折にお世話になったハルヴァート氏が務められた。考古資料にみられる装飾をめぐる理論的枠組みが枚挙され、そのうち何を重要視するかを選択するのは考古学者の宿命であるとの発言が印象に残った。また、後期新石器時代の例としてハラフ彩文土器の市松文やロゼット文、あるいは時代を下って前4千年紀の土器の彩文などを挙げながら、その解釈が試みられた。

その後、いよいよ個別の研究発表が開始された。各々の表題は図2にあるが、ここでは発表の順序にこだわらず、2日間にわたる発表と議論の内容を俯瞰して、目立って取り沙汰された話題から言及してみたい。

まず、土器の色調や文様・文様構成の意味が、議論の焦点の一つになった。最初の研究発表を行なった M. ルミエール (Le Mière) 氏らは、最古級の土器に多い暗色の器面を技術と伝統の問題から論じたうえで、先土器新石器時代の緑泥岩製容器との類似を色調のみならず器面調整や器形の点でも指摘し、意図的な低火度焼成による発色の可能性を示唆した。また、B. ロバート (Robert) 氏は、欠席のため代読での発表だったが、いわゆる原ハラフ (Proto-Halaf) 段階からハラフ後期にかけて、土器装飾の意図が人間集団のアイデンティティの表象から特異性の強調へと変化することを主張した。なかでも、動物形の象形土器の文様構成に実際の動物の解体方法に倣った例があるとの指摘は、M. エルダルクラン (Erdalkıran) 氏の発表でまとめられたハラフ土器の動物文様と相まって、興味深い話題提供であった。ニュウエンハイス氏の発表はより理論的で、「文字」にあたる文様が「文法」に従った構成により施文された結果、視覚的に表示される意味について考察したものであり、R. オズバル (Özbal) 氏の発表でも、同様の視座からハラフ文化の地理的限界について議論された。F. ホール (Hole) 氏もまた、代読での発表ではあったが、ウムム・クセイール (Umm Qseir) 遺跡出土のハラフ土器を主たる例に「文法」的要素を扱い、器形と文様の選択からその構造と変異性を検討した。

後期新石器時代の彩文土器で代表例とされるのはハラフ土器であるが、その主たる分布範囲から外れる地域の事例を比較対照的に検討する発表も多かった。A. ミークス (Meaks) 氏はイラン南西部のママサニ地域、L. チェルニアック (Czerniak) 氏らはトルコ中央部チャタルホユック (Çatalhöyük) 東遺跡、I. フランツ (Franz) 氏はチャタルホユック西遺跡をそれぞれ採りあげ、A. ナバハス・ヒメネス (Navajas Jimenez) 氏にいたっては、エジプト先王朝期のナカダ (Naqada) 遺跡の事例を報告していた。筆者(小高)の発表もこの類であり、北レヴァントのルージュ盆地の資料から、土器装飾にみられる保守性とハラフ土器の影響について論じた。先述のオズバル氏の発表もまた、北レヴァントのテル・クルドゥ (Tell Kurdu) 遺跡の例を扱ったものである。

いっぽう、ハラフ文化の分布範囲内の事例としては、まず J. ベッカー (Becker) 氏からバリアフ川流域のテル・タウィーラ (Tell Tawila) 遺跡およびテル・フウェーラ (Tell Chuera) 地域についての報告があった。H. テキン (Tekin) 氏は、トルコ領内ティグリス川上流域の2遺跡、ハケミ・ウセ (Hakemi Use) とカラヴェリヤン (Karavelyan) について発表した。前者はハラフ文化に先行するハッスーナ／サマッラ (Hassuna/Samarra) 文化の遺跡として知られる。また、ユーフラテス川中流域の

テル・ハルラ (Tell Halula) 遺跡について報告した J.-M. ファウラ (Faura) 氏らは、同遺跡のもつ長い文化堆積を活かして、最古級の土器からハラフ土器まで編年に沿った解説を行なった。

土器をめぐる素材については、2本の発表があった。B. ニルハム (Nilhamn) 氏は、壁面・床面装飾、復顔頭骨、白色容器、プラスターの塗布された土器など、彩文の施された多様なプラスター製品を採りあげて、それら互いの関係性を論じた。C. ブレニケ (Breniquet) 氏は、代読での発表ではあったが、世界中にみられる編みもの・織りもののパターンと土器装飾との相似性を、西アジアの後期新石器時代の彩文に見出す試みを行なった。

ほかに、クルエルス氏による発表は、土器の出現およびいわゆる原ハラフ段階という二つの移行期を中心に、北メソポタミア後期新石器時代の土器の発展過程を俯瞰する内容であった。A. ゴメス・バッハ (Gómez Bach) 氏の発表で扱われたのは、土器製作時の動作連鎖 (chaîne opératoire) であり、テル・ハルラ遺跡やテル・チャガル・バザル (Tell Chagar Bazar) 遺跡では、さまざまな装飾の方法や技術、文様が選択される過程に土器製作組織の固有性がみられるとのことであった。M. ホプウッド (Hopwood) 氏は、供膳に使われるハラフ彩文土器と盛られる食べものとの関係について、トルコ南東部、フストゥクル・ホユック (Fıstıklı Höyük) 遺跡の資料を用いて論じた。また、理化学的分析は折々の発表で触れられてはいたが、それを主題にした発表は意外にも少なく、D. フシャンスキー (Všianský) 氏らのグループが、テル・アルビッド・アビヤド遺跡出土彩文土器の顔料について分析した結果を報告したくらいであった。

すべての研究発表終了後、総合討論が行われた。しかし、発表の合間に討論の時間は幾度も設けられていたし、なにしろ参加者たちは四六時中、互いに顔を突き合わせていたわけなので、研究発表に基づく議論は昼夜を問わずのべつ幕なしに繰り広げられていた。そのせいか、この場で一番の話題となったのは、西アジア後期新石器時代の土器研究をさらに進展させるため、我われが次にとるべき行動についてである。具体的には、定期的かつ継続的なワークショップの開催、テーマや参加者の範囲の設定にかんする方針、昨今の情報通信技術を利用した常設的な意見交換や情報発信の仕組みづくりなどが話し合われた。その活気にあふれた様子はあたかも決起集会のようで、この分野の研究者をつなぐ新しい求心力が生まれたことを確かに感じさせてくれた。

4日目 (1月30日) は予定より早めの8時過ぎにレイヴィスを発ち、ブルノ到着後、順次解散となった。バスはまず、往路では夜の暗闇であった溪谷沿いをひた走り、美

しい車窓の景色にカメラを向ける者も少なくなかったが、やがて山間を抜けたころには、さすがに多くの者が疲れを隠せず眠りに落ちていた。筆者はその日のうちにブラハまで戻る必要があったため、昼ごろブルノに到着してすぐに別れを告げたが、その後、参加者の一部は研究機関を訪問するエクスカッションに赴いたようだ。

帰路の車中にいたるまで、まさしく「合宿」のようなワークショップであったが、そもそも我われはフィールドワーカーとして調査現場での共同生活に慣れ親しんでいる身であり、東欧の冬の大自然に囲まれながら、研究の話題に集中できる環境を存分に堪能することができた。オーガナイザーの三氏はもちろんのこと、楽しい滞在をきめ細やかな気配りで支えてくださった、「Chata Dolina」のマティウツォヴァ氏のご母堂、ご夫君、従業員の皆さん、それに準備段階から開催後までの雑務を背負いつつ、明るく親身に應對してくれた学生スタッフの皆さんには、心よりお礼申し上げたい。

なお、研究発表者の多数の賛同を得て、本ワークショップの研究発表集が作成されることになっている。すでに原稿の提出は締め切られ、オーガナイザーによる編集作業が進んでいるはずだ。順調にいけば2013年の夏頃、オックスボウ社 (Oxbow Books) より刊行される予定である。次なる展開への円滑な移行のためにも、開催時の熱が冷めぬうちに、遅延なく出版に漕ぎ着けることを祈りたい。

おわりに

西アジアにおいて、後期新石器時代の遺物の報告は20世紀初頭から散見されるが、その研究が本格化したのは、私見では1930年代のことと考えている。その後、たとえばF. マトソン (Matson) など、優れた土器研究者たちがこの分野にかかわってきたが、現在の「後期新石器時代の土器研究」という専門領域が確立したのは、ワークショップにも参加されたルミエール氏の活躍に拠るところが大きい。1970年代後半より、彼女はこの時代を集中的に、しかし地理的には幅広く、数多くの遺跡から得られた土器を体系的に研究し続けてきた。筆者はこのワークショップの後、2012年3月にフランス・リヨンにある彼女の研究室を訪れたが、そこで観察させていただいた土器コレクションの質の高さには驚きを隠せなかった。出土遺跡別にみれば、ほとんどが胎土分析用のため数限られた標本群ではあるものの、ヴァラエティにかんしては世界各国の調査団が発掘した西アジア後期新石器時代前半の諸遺跡について、ほぼ完全に網羅されていたのだ。むろん、標本を提供した調査代表者や収蔵管理者の厚意のおかげもあろうが、いっぽうで、そういった責任ある立場の方がたが押し並べてルミエール氏の能力に期待をかけたからこそその結果である。



図5 ワークショップの参加者たち

彼女はおよそ20年間にわたり、ほぼ一人で尽力を続けてきたことで、それだけの信頼を勝ち得、ひいては後期新石器時代の土器研究の地位を確立してくれた。そして、1990年代後半から、このワークショップのオーガナイザーを務めたニュウエンハイス氏やクルエルス氏らが彼女に続き、自国の調査団が手掛けているわけでもない後期新石器時代遺跡の調査に、出土土器の研究のために招かれるまでになっている。それだけ、土器研究の「専門性」が重視されはじめていたわけだ。

そこまでは遠く及ばぬ立場ながら、筆者はワークショップ参加者の多くと同様、幸いにも遺跡から出土した貴重な土器資料を研究させていただける状況にある。ルミエール氏個人の力で切り拓かれたともいえるこの分野には、20年の時を経て優れた後継者たちが登場し、今ようやく、彼らを核に各国・各調査団の土器研究者を結ぶ紐帯が生まれつつあるのだ(図5)。筆者自身、機を逸さずその輪のなかに加わられたことを素直に有難く思うし、今後この紐帯が生み出す相乗効果に期待するところは大きい。ただし、筆者を導いてくださった先生方はともかくとして、その場に同席してくれるような同志がなかなか身近に現わ

れないという点は、少々複雑な思いである。西アジア後期新石器時代を研究の範疇としている、若手の石器研究者や石器研究を志すより若い大学院生は、決して少なくないのだが。ライデンにおける国際会議の報告(小高 2010)でも述べたように、我が国の西アジア考古学界は後期新石器時代の調査・研究にかんして長年の蓄積を有しており、先述の筑波大学での国際シンポジウムなどに示される通り、土器研究の進展に対する寄与も知られている。そして今回、さらなる継続的な貢献を期待されているようにも感じられた。本ワークショップは、開催期日が大学の入学試験や学期末試験の時期に重なってしまったこともあって、日本から参加したのは筆者一人だったが、国内では少なくとも他3名の先生方にオーガナイザーから声が掛かっていたと聞く。僥越ながら、用意されるはずの次の機会には、その先生方のみならず、これから伝統を受け継ぐべき若い世代が数多く加わってくれることを期待したい。

なお、本稿における外国語のカタカナ表記については、下釜和也氏に多々ご教唆いただいた。むろんのこと責は筆者にあるが、末筆ながら記して謝意を表する。

参考文献

- Healey, E. 2008 6th Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Fertile Crescent: STEPS (Studies in Technology, Environment, Production and Society). *Neo-Lithics* 1/08: 40-42.
- Nieuwenhuyse, O., A. Russel, R. Bernbeck and P. Akkermans 2009 Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia. Leiden, 24-28 March 2009. *Neo-Lithics* 2/09: 39.
- 小高敬寛 2010「オランダ・ライデンで開催された国際会議『北メソポタミアの後期新石器時代を読み解く』」『西アジア考古学』11号 149-154頁。
- 小泉龍人 2008「ウバイド期に関する国際研究集会」『西アジア考古学』9号 165-169頁。
- 常木 晃 2009「国際シンポジウム『西アジアにおける土器の出現：パイロテクノロジーの原点を求めて』を終えて」『Newsletter「セム系部族社会の形成」』16 1-5頁。

小高 敬寛

早稲田大学高等研究所

Takahiro ODAKA

Waseda Institute for Advanced Study,

Waseda University